発見！おごおり遺産

No.1 ～薩摩街道と古飯～

皆さん、小郡市は文化遺産の宝庫だということを知っていますか？今号から、近年の市内調査で「再発見」した文化遺産を隔月でご紹介していきます。

古飯の恵比須像

江戸時代、九州を南北に走る幹線道路を薩摩街道といいました。長崎と小倉を結ぶ長崎街道から山家宿（筑紫野市）で別れ、乙隈・干潟・松崎・古飯・光行を通って久留米方面、そして熊本・鹿児島へとつながっていきます。市内では松崎が宿場町となり、参勤交代の大名をはじめ、多くの旅人でにぎわいました。松崎には南北の構口など文化財も多く、中でも江戸時代に建てられた大型の旅籠油屋は、当時の姿に復原する工事が進められています。

宿場町松崎とともに発展したのが古飯です。古飯は、幕末に活躍した古屋佐久左衛門・高松凌雲兄弟の出身地として有名ですが、江戸時代を通して街道沿いの町として栄えました。薩摩街道が天下道（大名の参勤交代道）となった延宝年間（1673～1681年）に人が集まり始め、宝永年間（1704～1710年）には古文書に「古飯町」として登場します。古飯は、都市と農村の両方の性格を持ち、周辺に住む人々にとっては、余った生産物の売却や生活物資の購入のために重要なところでした。

古飯町は、元禄年間（1688～1704年）の記録に、戸数は28戸、町の長さは2丁56間（約320m）とあります。また、同時期には「小宿」に取り立てられた記録もあり、徐々に発展する町のようすを見ることができます。現在の古飯には古い町屋はほとんど残っていませんが、昔から伝わる「屋号」を持つ家が多いこと、街道沿いにある200年以上歴史を持つ恵比須像の存在などがその繁栄を物語ります。

また、古飯から南に進んだ光行に、茶屋という地名があります。ここには江戸時代から大正時代にかけて、街道を歩く人の休憩場所「茶屋」が6～7軒ありました。周辺には春の桜並木が美しい光行土居もあり、現在でも多くの人々が街道歩きを楽しんでいます。

問合せ先　文化財課☎75・7555

光行土居の桜

おごおり遺産とは？》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと